

■いわて文化ノート

岩手県域で出土する鎌倉時代の東北地方産陶器

主任専門学芸員 羽柴直人 (考古部門)

中世を対象とした考古学研究では、焼物＝陶磁器が重要な位置を占めています。なぜならば陶磁器の年代が、遺跡、遺構の所属年代を決定する基準となっているからです。そして、陶磁器は遠隔地の産地から搬入されているものが多く、その産地を明らかにすることは、流通、地域間交流といった人の動きを示す重要な資料と成り得るのです。今回、ここで紹介するのは、13世紀後半から14世紀前半頃、概ね鎌倉時代後半に、東北地方南部の各地で製作された「東北産瓷器系陶器」の岩手県内における出土分布についてです。これまで、岩手県内での「東北産瓷器系陶器」は、北上川流域での出土が知られており、筆者も、その分布域は北上川流域に限定されると理解していました。しかし、二戸市、軽米町での出土を相次いで知り、また、沿岸部の気仙地区での事例も新たに知ることができ、これまでの分布範囲と流通経路の解釈を大きく変更する必要が生じました。

■東北地方産瓷器系陶器

13世紀後半から14世紀前半頃(鎌倉時代後半)、宮城県～福島県域で、陶器の窯が数ヶ所まで操業していました。これらは、愛知県域の常滑焼などの技術系譜(瓷器系陶器)に連なる窯であり、ほぼ同時期に成立し、操業終末年代も概ね同時期のものです。代表的な窯を示すと、伊豆沼窯(宮城県栗原市)、三本木窯(宮城県大崎市)、



白石窯(一本杉窯)出土陶器
宮城県教育委員会「一本杉窯跡群」報告書より引用
(写真使用承認 東北歴史博物館)

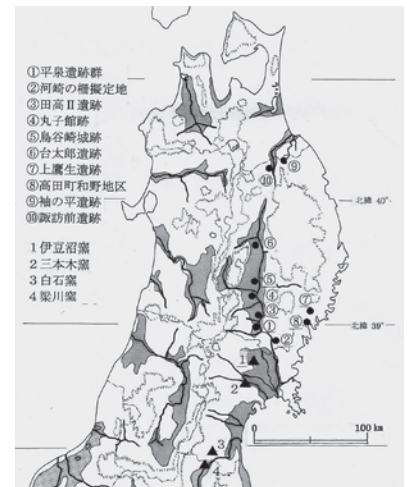
白石窯(宮城県白石市)、梁川窯(福島県伊達市)があげられます。これらの窯は、それぞれが多数の支群の窯を有し、継続的に安定した生産量を確保していた窯です。これらの諸窯を総称する呼称は明確に定まっていますが、ここでは「東北産瓷器系陶器」と称することとします。これらの窯で生産していた陶器は、大甕、片口鉢(挿鉢)が中心で、他に中型の広口壺などを少量生産しています。この器種組成も母体となった常滑窯などの瓷器系陶器と共通するものです。

■東北産瓷器系陶器の出土分布

現在、「東北産瓷器系陶器」の窯跡は岩手県内では確認されていませんが、「東産瓷器系陶器」は県内でも出土が確認されています。これは、宮城県域などの窯で焼成された陶器が、岩手県域に運ばれ使用されたことを示しています。

(1) 北上川流域の出土分布

岩手県内での出土は、上述のように北上川流域に多くの事例があります。その中で最もまとまった量出土しているのは平泉の遺跡群です。平泉では、東北産瓷器系陶器に限らず、県内で最もまとまった量の鎌倉時代の考古遺物が出土しており、奥州藤原氏滅亡後も、地域の中ではある程度の求心力を有する場であったことがわかります。平泉の他では、一関市河崎の柵擬定地、奥州市田高Ⅱ遺跡、北上市丸子館跡、花巻市鳥谷崎城跡、盛岡市台太郎遺跡などで出土しており、北上川に沿った出土分布が読み取れます。この分布は、陶器が北上川を舟運によって運搬されたことを示しています。そして、これらの陶器の形態・胎土は、東北産瓷器系陶器の中でも、北上川下流域に近い「伊豆沼窯」、「三本木窯」の製品に類似し、これらの窯で焼成された陶器が岩手県域の



東北産瓷器系陶器窯と岩手県内の出土遺跡

北上川流域にもたらされていると判断されます。「伊豆沼窯」の製品は迫川水系を利用して北上川へ、「三本木窯」の製品は江合川や鳴瀬川水系を利用して北上川ないしは石巻湾に運ばれ、北上川を遡航して、岩手県域にもたらされたとするのが妥当です。また、岩手県域にまだ未発見の「東北産瓷器系陶器」系統の窯が存在する可能性も否定はできません。しかし、岩手県域の「東北産瓷器系陶器」の出土量は、宮城県域に比べると格段に少なく、「伊豆沼窯」、「三本木窯」のような多数の支群を有する大規模な窯が存在する可能性は低いと考えます。もし、窯があったとしても、小規模で、操業期間の短いものであると想像されます。

(2) 気仙地方の出土分布

これまで、知られていた岩手県内の北上川流域以外での「東北産瓷器系陶器」の出土事例は、大船渡市日頃市町の上鷹生遺跡の事例のみでした。上鷹生遺跡は13世紀～15世紀に営まれた居館遺跡と推測されます。出土した「東北産瓷器系陶器」は甕で、口縁部から底部まで接合する全体形のわかる資料です。生産窯は「伊豆沼窯」ないし「三本木窯」と筆者は考えます。この資料が、北上川流域を離れた気仙地方で出土したことは、



大船渡市上鷹生遺跡陶器

[写真提供(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター]

「東北産瓷器系陶器」の北へ向かう流通路が、北上川ルートのみではなく、海路を用いて、太平洋岸を北上するルートの存在をも示唆するものです。

平成23年度に、筆者ら岩手県立博物館職員は、津波により被災した陸前高田市立博物館の収蔵資料の回収をおこないました。回収資料の水洗作業の過程で、「東北産瓷器系陶器」が市立博物館資料の中に存在することに気づきました。陶器は広口壺と片口鉢の口縁部破片で、双方ともこれまで中世陶器と認識されていなかったものと推測されます。胎土等の特徴から「伊豆沼窯」ないし「三本木窯」の製品の可能性が高いものです。広口壺は注記がなく出土地不明ですが、市立博物館の収蔵品の傾向からすると、陸前高田市内か周辺の気仙地方出土の可能性が高いと考



陸前高田市立博物館蔵陶器広口壺

えられ、また、片口鉢片は陸前高田市高田町和野地区出土の記載があるものでした。この陸前高田市立博物館の「東北地方産瓷器系陶器」は、上鷹生遺跡の事例に加え、太平洋岸を北上して陶器が搬入されるルートの存在証明を補強するものと評価できます。

(3) 馬淵川流域の出土分布

岩手県の地勢を概観すると、北緯40°付近の分水嶺によって、県内陸部は、北上川水系と馬淵川水系に分断されています。これまで、筆者は「東北産瓷器系陶器」の県内への搬入は北上川の遡航によるもので、分水嶺を越えて馬淵川流域への搬入は想定していませんでした。ところが、平成23年度に軽米町袖の平遺跡の発掘調査が軽米町教育委員会によっておこなわれ、中世前半の居館遺跡と確認されました。出土遺物を調査担当の藤田直行さんに見せていただいたところ、出土陶磁器の中に、口縁部形態から「東北産瓷器系陶器」の大甕と解釈される口縁部片があり、分水嶺を越えた地域にも「東北産瓷器系陶器」が存在することに驚きを感じました。

今年度、軽米での「東北産瓷器系陶器」の存在を、二戸市教委の柴田知二さんに話をしたところ、柴田さんは、二戸市諏訪前遺跡においても産地のわからない片口鉢陶器片があり、それらが「東北産瓷器系陶器」の可能性もあるかもしれないとの見解を示しました。諏訪前遺跡は、13~14世紀前半を主体とする大規模な居館遺跡です。そして、機会をあらため、北上川流域出土の「東北産瓷器系陶器」と比較したところ、胎土・器形の比較でも共通点が多く、諏訪前遺跡の陶器も「東北産瓷器系陶器」との確信を得ることができました。

■「東北産瓷器系陶器」の流通経路

二戸市諏訪前遺跡の陶器片口鉢
(二戸市埋蔵文化財センター所蔵)

分水嶺を越えた馬淵川、新井田川流域にもたらされた東北産瓷器系陶器の搬入経路を想定してみます。陶器の重量を考えると陸路での分水嶺越えは非常な困難を伴い、一般的なルートではないと考えられます。考えられるルートは、宮城県域の沿岸部から、太平洋岸を北上し、馬淵川、新井田川の河口の八戸付近に至り、そこから河川を遡上しての運搬と考えられます。すでに記したように、宮城県沿岸域から太平洋岸を北上して、気仙地方に至るルートの存在を示すことができています。それに連続して、気仙地方からさらに太平洋沿岸から北上し、八戸付近まで至る海上ルートは容易に想像できるものです。現在のところ、想定ルート上の閉伊、九戸の沿岸部、さらに八戸付近では、「東北産瓷器系陶器」の出土事例は確認されていませんが、これらの地域でも「東北産瓷器系陶器」の出土が予想されます。岩手県内において、鎌倉時代の遺跡調査事例は非常に少ない状況です。しかし、この時代の文献史料はさらに少なく、新出の史料の増加の望みはほとんどありません。岩手県内の鎌倉時代の歴史研究は考古学的手法を主流とせざるを得ないのです。今回示した「東北産瓷器系陶器」は一つの資料にすぎませんが、今後の研究には、このような個々の遺物の位置付けをおこない、その積み重ねが必要と考えます。